

唯物史觀の反省

井 藤 半 彌

一 はしがき

(1) 唯物史觀の反省

いまさら、ことあたらしく述べるまでもないことであるが、辯證法的唯物論がマルクス主義の哲學であり、唯物史觀（史的唯物論）が、これに立脚する歴史觀、社會觀であり、マルクスの大著『資本』がこの歴史、社會觀を基礎とする資本主義社會の分析である。昭和二年の春に一橋で、社會政策の講義をはじめたとき以來、唯物史觀の内容の紹介、吟味をつづけて今日に及んでいるが、三十數年後の今日でも、正直に告白すると、これにたいする考えが、まともっていないのである。私の立場からみても、唯物史觀、その根柢にある辯證法的唯物論には、學ぶべき多くのものが、ひそんでいるにもかかわらず、社會理想主義を固守するためか、全面的には、これ

に賛同しえないで今日に及んでいる。

赤松教授の退官記念號に執筆する機會が與えられることとなったとき、どういう題目にすべきか、だいぶん迷ったのである。なるべく同君の専門分野に近いものにした。それには、財政學のものは避け、社會、經濟政策の原理に關するものにしたと考え、結局、この題目におちついた。唯物史觀は同君がすでに學生時代から研究されていた題目であり、同君の學問生活の一半はこの檢討に向けられてきたといっても大過はない。ことに同君の處女作にして、また代表作でもある『ヘーゲル哲學と經濟科學』（昭和六年、同文館）が出版されたとき、それを、むさぼり讀んだときの興奮は、いまでも忘れることはできない。

この稿の題名は『唯物史觀の反省』ということになった

ているが、その取扱うところは歴史的事實にてらしてこれを吟味するのではなく、その方法についてのみである。それもこの全分野にわたるものではなくて、たんに唯物史観における人間思惟の地位、いわゆる上部構造と經濟的基礎との關係、歴史における個人の役割の問題、因果必然性と價值との關係等である。もっとも、これらの諸問題には、相互の間に不離の關係があり、結局のところ、唯物史観における個人の思惟の意義ともいえるのである。

ここで、研究の手引きとして使用した文獻は、マルクス、エンゲルスのものほかに、ゲオルキー・ヴァレンチノヴィチ・プレハーノフ（一八五六年—一九一八年）の二書、『歴史における個人の役割』（一八九八年）『マルクス主義の根本問題』（一九〇八年）である。前者については、木原正雄氏の邦譯（岩波文庫五一二〇、昭和三三年）、後者については、恒藤恭氏の邦譯（大正一〇年、岩波書店）等がある。この拙文で邦譯としてあげた頁數は、これを基礎とするものであるが、多少の變更を加えたところもある。これ以外に使用したものは、つぎの獨英譯書である。G. Plechanov, Die Grundprobleme des Marxismus;

autorisierte Uebersetzung aus dem Russischen von Karl Schmückle, hrsg. von D. Rjazanov, Wien—Berlin 1929.

—The role of the individual in history, trans. from the Russian by J. Fineberg, Moscow, 1946—Ueber die Rolle der Persönlichkeit in der Geschichte, Berlin 1951.

プレハーノフの書物をも手引きとすることについては、必ずや現在、一部の人々の間には異論があるであろう。これは彼が一九〇三年のロシア社會民主労働黨第二回大會後に、レーニンのひきいるボルシェヴィキをはなれて、メンシェヴィキにうつり、レーニン等と對立した事實とも關連があるといわれている。このためにマルクス主義者としての學問活動までが過小評價されてきた、きらいがないとはいえない。しかし、彼の著作、ことにここに用うる二書等は、マルクス主義の文獻として、すぐれたものであり、今日でも價值をうしなっていない。例えば、リヤザノフは、一九二九年に自ら編纂した前掲の『マルクス主義の根本問題』獨譯の序文で、同書を「今日でもなお十分な意義をもっているかがやかしい研究」（序文一頁）と述べている。ことに、その敘述の平明なことも、難澁な文體をきらう、いなこれに敬意をあらわ

(3) 唯物史觀の反省

い得ない私を、つよく、ひきつけた一事由である。書物は一つの客觀的事物である。著者の政治的權力につよく關連をもたして、不當に低く、或は不當に高く評價しようとする誘惑には警戒を要する。

ここでは本誌の『研究ノート』の方法にならない、マルクス主義者、時に批判者の見解を紹介しつつ、これについての卑見ないし感想を述べてみたい。

二 唯物史觀の要旨

唯物史觀とはどういうものか。これについてのくわしい解説は省略する。マルクス及びエンゲルスは、その著書、論文、書簡等のなかで、これについての見解を述べている。そのうちの重要な部分を邦譯して、あつめたものに、つぎの便利な書物がある。マルクス・エンゲルス原著、向坂逸郎・岡崎次郎編譯『唯物史觀』（昭和二年、大月書店）。

マルクス、エンゲルスが書いたもののうち、唯物史觀とは何かということについて、もっとも簡潔に、その全貌をえがくものは、マルクスの Karl Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, 1859. の序文 (Vorwort) ——

カウツキーがマルクスの死後に發見して同書につけ加えた序論 (Einleitung) ではない——のつぎの部分である。一部の讀者の便宜のために、その全譯を、ここにかかげておく。

「人間は、その生活の社會的生產において、一定の、必然的な、またその意思から獨立した諸關係、すなわち、その物質的生產諸力の一定の發展階段に應ずる生產諸關係を認容する (eingehen)。この生產諸關係の全體が、社會の經濟的機構、現實の基礎を構成する。この上に法律的政治的上部構造がたてられ、また、これに一定の社會的意識諸形態が對應する。物質的生活の生產方法が、社會的、政治的及び精神的生活行程を條件づける。人間の存在を決定するものは、その意識ではなくて、逆に、その意識を決定するものは、その社會的存在である。」

右の文のなかの eingehen という語について「はいりこむ」と邦譯されることが多いが、福田徳三、河上肇兩博士の考證にもとづいて、ここでは、とくに「認容する」という譯語をえらんだ。これ以外の部分の邦譯についても兩博士の研究を參考とした。福田徳三『唯物史觀經濟史出發點の再吟味』（昭和三年、改造社）中の『唯物史觀

公式』なるものに於ける『アインゲイエン』なる語に關する河上福本兩氏の解釋について」(二二三—三五頁) 參照。

さて、この部分は唯物史觀の根本をしめすものであつて、社會の構成、社會存在と社會意識の關係を明かにするものである。マルクスは、かかる立場から出發して、つぎに社會の變化の行程について解説している。

「社會の物質的生產諸力は、その發展のある階段において、從來それがその内部において活動しておつたところの現存の生產諸關係——これにたいする法律的いいあらわし方でいえば、所有諸關係——と相衝突するにいたる。これらの諸關係は、生產諸力の發展諸形態から、その桎梏へと轉化する。そこで社會革命の時期がはじまる。經濟的根柢の變化とともに巨大な全上部構造は、或は緩かに、或は急速に變革される。かかる變革を觀察する場合に、つねに區別すべきは、經濟上の生產諸條件における、自然科学的に忠實に確認さるべき物質上の變革と、法律的、政治的、宗教的、藝術的または哲學的、簡單にいうと、觀念諸形態——それにおいて人間がこの闘争をみとめ、またその抗争をする觀念的諸形態——とである。一個人が何であるかということを、自分がどんな

ものかと自らに思われることによって判斷しないように、人はかかる變革時期を、その意識によって判斷しないので、かえつて、この意識を物質的生活の衝突にもとづいて、すなわち社會的生產諸力と生產諸關係との間の現存の闘争にもとづいて説明しなければならない」。

つぎに社會の變化の條件、これにおける個人の役割について述べていう、「一つの社會組織は、それをもって十分な廣さであるとしてゐる總ての生產諸力が發達してからでなければ、けつして沒落しない。また新しい、より高い生產諸關係は、その物質的存在諸條件が、古い社會自體の胎内に孵化される以前には、けつして、これにかわつておこらない。故に人類はつねにそれが解決する課題のみを自らに課する。何となれば、さらに綿密に觀察すると、その課題自體は、その解決の物質的諸條件がすでに現存するか、少くとも發生の過程においてある場合にのみ、はじめて發生することを、つねに認めるであらう。大體のことをいえば、アジア的の、古代的の、封建的の、及び近世市民的の生産方法をもつて、經濟的社會組織の進化的諸時期と稱することができる。市民的生產諸關係が社會的生產行程の最終の敵對的形態であ

(5) 唯物史觀の反省

る。ここに敵對的というのは、個人的敵對の意味ではなくて、諸個人の社會的生產諸條件から發生する敵對の意である。しかしながら市民社會の胎内において自ら發展する生産諸力は同時に、この敵對の解決のための物質的諸條件をつくりだす。さればこの社會構成とともに人間社會の前身はおわる。」

これが一部の學者のいうところの唯物史觀の公式の全文である。

プレハーノフは『マルクス主義の根本問題』のなかで、社會生活の基礎と上部構造に關するマルクス、エンゲルスの考えを、つぎのように分解している。

- (一) 生産力の狀態
- (二) これによって制約される經濟諸關係
- (三) 經濟的「基礎」の上に發生した社會的、政治的秩序
- (四) 一部は直接に經濟によって、一部は經濟の上に發生した社會的政治的秩序によって規定された社會的人間の心理
- (五) この心理の諸特性を反映する諸種のイデオロギー(精神的諸文化)(邦譯一三一—一三二頁、獨譯八一頁)。

これは、社會生活の階層構造について基本的なものから出發して、そうでないものへの順位をしめすものである。基本的なものの變化が原因となつて、漸次、上部構造について變化が及んでゆくのである。

ここで問題としたいのは、人間の思惟、政治的活動等、いわゆる上部構造が社會發展においてもっている重要性である。マルクスは、その起草にかかる「國際勞働者協會」總務委員會の、フランスにおける内亂に關する一八七一年の宣言第三部のなかで、つぎのように述べている。「勞働者階級は實現すべき何らの理想ももっていない。崩壊しつつある市民社會の胎内に、すでに發展してきた新社會の要素を解放するだけでよいのである」と。要するに、政治は、因果必然的な現象の生成について、單に助産者の役割を演ずるに過ぎないというのである。

三 スタムラーの批判

これについては、理想主義者の側から十九世紀以來今日まで、絶えず批評が加えられている。その代表的なものは新カント主義者のそれである。ここでは、その一例としてスタムラーの學說の一斑を紹介しよう。

スタムラーは、その代表作 Rudolf Stammler, Wirtschaft und Recht nach der materialistischen Geschichtsauffassung, 1. Aufl., 1896, 4. Aufl., Berlin und Leipzig 1921. の隨處で唯物史觀に批判を加えているが、このなかで、マルクスの上記の見解に反對している、「もしかりに社會的發展が、もっぱら因果必然性による統一的自然過程において行われるものとせば、それに従わんと意識的に決意することは、すべて全く無意味となるであろう。それは丁度、かたい決意の下に、地球を太陽の周圍に廻轉せしめようとする努力を意義あるものとして是認しようとするのに等しい」(第四版四一五—四一六頁)。

スタムラーは、別の小著 R. Stammler, Die materialistische Geschichtsauffassung, 2. Aufl., Gütersloh 1927. でも、唯物史觀に關する見解の概要を述べている。そのなかでも、彼は人間の精神生活には、發生史的觀察と體系的觀察の二者があり、兩者を區別すべきであると解し、前者は、印象と欲求が生成する方法及び根據を問題とし、後者は、その客觀的正確性を追及するものであると主張し(同書、五〇頁)、ついでいう、「唯物史觀は社會的運動の生成の觀察と、その發展の傾向の確定に限られて

いる。これは、しかしながら、その内面的正當性のため
のいかなる根據も提供しえないものであることを、さ
らない。そしてまた、科學的に認識しようとする社會
運動に關する自然法則的生成を、黨派努力によって助
長しようと欲するとつけ加えることによって、一つの解
くべからざる矛盾におちいる。事實、現象の自然法則
の觀察についてのみ關するものとせば、『助長するとい
うこと』は空しい業であろう。天文學的に豫期される
月蝕の生成について、それをさらに助長しようとする團
體をつくったりすることは無意味である。助長するとい
うことが意味のある場合は、自然力の盲目的支配を單
に觀察するにとどまらないで、人間の意欲に活動餘地
が見出されるものでなければならぬ」(前掲書、五一頁)。

さらに、必然性には因果的必然性と目的論的必然性があることを主張している、

「運動の必然なことを強調するについての可能性に二つある。因果的必然性と目的論的必然性、原因及び作用にたいするものと、目的及び手段にたいするものである。しかしながら、『辯證法的』ともいふべき、必然性の第三の、獨自の種類は、意味もなく、また重要性もない」

(7) 唯物史觀の反省

(前掲書、五三頁)。

要するに、スタムラーによると、政治活動等を認めることは、人間の理想・目的論的思惟の要素をとりいれるものであり、この意味でマルクス主義は因果的必然論のみで一貫していないというのである。

この主張は、議論の内容に精粗の別こそあれ、唯物史觀にたいする多くの人々の批判の基本的なよりどころとなっているものである。わが國における代表的批判書は、小泉信三『マルクス死後五十年』(初版昭和八年、改訂版昭和十二年、改造社)である。

四 經濟と上部構造の交互作用

この批判にたいしては、十九世紀末にエンゲルスが、ロンドンで書いたつぎの三の手紙のなかで回答を述べている。これは一部の批判者により、エンゲルスが舊説にくらべて、非經濟的要因の作用を、よりつよく認めてきた一例證としてあげられるものである。

(一)一八九〇年九月二一日附のヨゼフ・ブロッホ(J. Bloch)宛の手紙。

(二)同年一〇月二七日附コンラード・シュミット(C.

Schmidt)宛の手紙。

(三)一八九四年一月二五日附ハインツ・スタルケンブルグ(H. Starkenburg)宛の手紙。

原文は K. Marx/F. Engels, *Ausgewählte Briefe*, hrsg. vom Marx-Engels-Lenin-Institut Moskau, Moskau-Lenin-Strad 1934. 及び英譯 K. Marx and F. Engels, *Selected Correspondence 1846—1895*, trans. by Dona Torr, London, 1934. に收録されている。向坂・岡崎兩氏編譯『唯物史觀』にも邦譯されている。ここにかかげる邦譯は、これを基礎としたが、多少の變更を加えた個處もある。つぎに、この問題について、もっとも重要と思われる部分を引用しよう。

まず一八九〇年のブロッホ宛の手紙で主張している、「唯物史觀によると、歴史における窮極的決定的契機は、現實の生活の生産及び再生産であると。それ以上のことは、マルクスも私も主張したことはない。もしこれを曲解して、經濟的契機が唯一の決定的なものであるとする人があるならば、彼は、かの命題を化して無意味な抽象的な無稽の空語とするものである。經濟的狀態が基礎ではあるが、しかし上部構造の種々の契機……もまた

歴史的闘争の推移にその影響を及ぼし、多くの場合において有力に闘争形態を規定する」(前掲獨文三七四頁、邦譯二四四—二四五頁)。

また一八九四年のスタルケンブルグ宛の手紙のなかでも、同じ趣旨のことを、つぎのように述べる、

「政治的、法律的、哲學的、宗教的、文學的、藝術的等の發展は經濟的發展に依據している。しかし、それらはすべて相互の間にも、經濟的基礎にも反作用を及ぼす。經濟的狀態が原因であり、ただそのみが能動的であつて、他のすべては單に受動的な結果であるに過ぎないというのではない。そうではなく、窮極においては、つねに自己をつらぬく經濟的必然性の基礎の上で、交互作用が行われるのである。……従つて往々にして人々が安易にも考えたがするように、經濟的狀態の自動的作用が歴史をつくるのではなく、人間が自らその歴史をつくるのであるが、それは人間を制約する所與の環境の中で既存の事實的諸關係の基礎の上で行われるのであり、なかなづく經濟的關係は、いかにそれが他の政治的及び觀念形態的諸關係によって影響されるとしても、窮極においては決定的なものであり、ただそのみが理解にみちび

くところの一貫せる赤き絲なのである」(獨文四二—四一二頁、邦譯二五一頁)。

一八九〇年のシュミット宛の手紙のなかでも、同じ意味のことを述べているが、その中で、國家という上部構造が經濟的發展に及ぼす作用を認めるとともに、これに限界があること、これにつぎの三つの様式があることを明かにしている。

「經濟的發展にたいする國家權力の反作用には三つの様式がありうる。それはまず同じ方向にむかつて、おこり得る。その場合には、より急速に進行する。つぎには、反對の方面に動きうる。この場合には、今日では、いずれの大民族にあつても長い間には、かかる反作用は消滅してしまふ。或はまた、經濟的發展にたいして一定の方向を遮斷して、他の方向を指示することがありうる。この場合は、結局は、前述の二つの場合の一つに歸着する。しかし第二及び第三の場合には、政治的權力が經濟的發展に大損害を與えて力と物質との大量浪費をひきおこすことがありうるのは明かである」(獨文三七九頁、邦譯二三六頁)。

エンゲルスのことばは——またこれはプレハノ

フ『マルクス主義の根本問題』獨文五八—六九頁、邦文九四—一一頁。その他のマルクス主義者も、これを引用し裏書きするのであるが、——要するに、上部構造、觀念諸形態から經濟的基盤への反作用を、經濟的必然という大きなわくの内部においてという條件つきではあるが、とにかく反作用を認めるということである。

五 生産力と思惟

この問題について、私をもつ疑問について、その輪郭をつぎに掲げよう。

經濟と觀念諸形態との間に交互作用を認めるということとは、われわれの經驗事實にも合致することであり、正しいと思う。しかし社會の發展の原因として觀念形態から經濟的基盤への反作用を認めるということは、その程度だけ唯物論が觀念論に歩をゆずるものと解さなければならぬのではないか。觀念論の立場からみると、外界の環境、外界の物的存在が、生産力としての意義をもつようになるのは、われわれの思惟が、その作用ないし價値を認識したとき、その場合にはじめてそうなるのである。猫にとっては小判が無意味なように、無知な野蠻人

にとつては、水力電氣の動力源となる瀧の存在は生産力としての意義がない。ウラン鑛區の存在は原子力利用以前には、環境としての意義がなかったのである。人間の思惟が、その作用を分析し、その價値を認めるにいたって、はじめて、これが人間にたいして生産力、環境としての意義が発生する。人間がこの世に發生する以前の物的世界についても、同じことがいえるのである。

こういう風に理解してくると、こういう意味において、思惟が第一次的であるという解釋が成立するのである。物的存在は、人間存在の前提條件ではあるが、受動的となる。この物的條件の下に思惟が活動するのである。この場合に、かくして認識され、開發利用される生産力が、逆に思惟に反作用することは否定するわけではない。

これにたいして、つぎのような反對論がでるであろう。例えば瀧に動力源としての價値を人間の思惟が認めらるようになったのは、生産力の發展がある段階に達し、それに對應して學術が進歩した結果であり、この意味で生産力が第一次的であると。

ところが、われわれの立場からいうと、そのまた生産

力の意義を認め、進展せしめたものは、人間の思惟ではないかと主張したのである。結局、鶏がさきか、卵がさきかという争となる。この問題を終局的に決定するものは、唯物論か唯心論か、という古くして新しい哲學上の問題であろう。しかし「精神は脳という物質の作用である」とか、「物質は精神とは異なり、時間的にも空間的にも普遍的に存在するから物質が始原的である」等というが如き粗様な主張では、唯物論の證明とはならないことだけを述べておきたい。

なおこれに關連して、一部の讀者のために、つぎの二つのことに注意を喚起しておく。

(一)十九世紀の中頃以來、歴史家のなかに、マルクスの社會學說、辯證法的唯物論には賛成しないが、しかし歴史における動因としての經濟の重要性を認め、歴史の經濟的説明につとめるものが多くあらわれつつあることである。やや古い時代に例をもとめると、その立場は必ずしも同じではないが、ロジャース、アシュレー、ブライジッヒ、ゴータイン、ラムブレヒト等があげられている。彼等は、唯物史觀のように、社會生活發展の窮極の動因を必ずしも生産力にもとめるわけではなく、時と場合に

よっては、經濟以外の動因の意義を否定するわけではない。經濟に重要性をもとめる點は、これと同じであるが、その基本的立場に相違がある點について注意すべきである。

(二)またマックス・アドラーを中心とするオーストリアマルクス主義者が、マテリアリスティックという語を本體論における「唯物」的と解釋することに反對して、カント主義の立場からマルクス主義の基礎づけを試みている。私はアドラーのマルクス解釋に賛成するわけではないが、唯物史觀の反省について注目すべき一學說であることを指摘しておきたい。

つぎは、いま問題としたものとは、すこし違った側面のことであるが、意識と存在との關係についての河上肇博士の見解を紹介しておこう。河上博士は『マルクス主義經濟學の基礎理論』(『經濟學全集』第八卷、昭和四年、改造社)のなかで、「意識は存在によつて決定される」という立場からみれば、何人も一定の存在にたいして、みな同一の意識をもつべき筈であるにも拘わらず、事實はそうでないのは何故であるかを問題とし、答えていう、意識が存在の反映ということは、意識がいつでも存在を、

残る限なく、かつ正確に反映しつくすという意味ではない。そしてアドラツキーのつぎの文を援用している。

「一定の社會關係が成熟し且つ實在してゐても、これに對する意識がなほ缺けてをり、人々は未だ彼れ自身のなすところの總てを明細に理解しないといふことも明白である。……思惟は存在によつて決定される。だが思惟がかかる決定へ従ふのは、時として極めて緩慢に行はれる」(前掲書八三―八四頁)。

これまた存在が意識を決定するという一般命題について、たとえ第二義的とはいえ、文字通り妥當しない場合があることを認めているのである。

六 歴史における個人の役割

つぎに、問題としたいのは歴史における個人ないしは英雄、偉人の役割である。これも、いままで取扱つてきた問題とも關連があるが、これをやや違つた角度からながめようと思う。これについてのマルクス主義の見解は、ブレハーノフの『歴史における個人の役割』に、きわめて平明に展開されている。しかしすでにエンゲルスも一八九四年のスタルケンブルグ宛の手紙のなかで、つ

ぎのように述べている。

「人間が自らその歴史をつくるのであるが、それは、人間を制約する所與の環境の中で、既存の事實的諸關係の基礎の上で行われるのであり、なかなづく經濟的關係は、いかにそれが他の政治的及び觀念形態的諸關係によつて影響されるにしても、窮極においては決定的なものである。……いわゆる偉人が問題になる。かような一人が、そしてまさに、この人が、この特定の時に、この特定の國に出現するということは、もちろん純粹の偶然である。しかし、われわれが彼を抹殺し去つても、その代りの者に對する要求はなくならず、そして、この代りの者は見出される。善かれ悪しかれ、結局は見出されるのである。……ナポレオンが出なかつたならば、誰か他の人がその代りにその地位にあらわれたであらうということ、それは、必要となればその人物が必ず見出されたということによつて明かである。ケーザル、アウグストス、クロムウェル等は、それであつた。唯物史觀を發見したのはマルクスであるが、テイエリも、ミニエも、ギゾーも、一八五〇年までのイギリスの全歴史家も、この發見への努力がなされたことを示している。そしてモル

ガンによる同じ史觀の發見は、そのために時が熟していたこと、そしてまさに發見されざるを得なかったことを示している。

歴史上の他のすべての偶然事、また偶然と見えることについても同様である。われわれが研究しようとする領域が經濟的なものから遠ざかって、純粹に抽象的な觀念形態的なものに近づくにともない、この領域がその發展の中に偶然性を示すことが、ますます多くなってくる。

またその曲線は、ますますジグザグに進行する。しかし、あなたがこの曲線の平均軸線を描いてみるならば、觀察される期間が長ければ長いほど、また取扱われる領域が大きければ大きいほど、あなたは、この軸線が經濟的發展の軸線により近似的に並行することを見出すであろう」(獨文四一一—四二二頁、邦譯二五一—二五三頁)。

プレハーノフも、この立場を祖述し、『歴史における個人の役割』で、さらに綿密に分析している。すこし冗長、重複のきらいもあるが、同書から重要と思われる部分を、つぎに引用してみよう。

歴史上の出來事の解釋について、一般的原因に歸する立場と、歴史上の人物の個人的特質に原因をもとめる立

場という二者が對立している。その極端なものは、他の立場の意義を認めなかったのである。「この二つの意見の衝突は二律背反のかたちをとった。その第一の項は一般的法則であり、第二の項は個人の活動であった。第二の項の立場にたてば、歴史とはいろいろの偶然的連鎖にすぎないし、第一の項の立場にたつと、歴史上の事件の個性的な面までが一般的原因の作用によって規定されるようにおもわれた。だが、もしも事件の個性的な面までが一般的原因の影響によって規定され、歴史上の人物の個人的特質によって左右されないものとせば、こうした特徴は一般的原因によって規定されて、これらの人物がどれほど變つても變えられないということになる。こうして、この理論は宿命論的性格をおびてくる」(英譯四八頁、邦譯八一頁)。

しかしプレハーノフは、個人的特質の相違によって、歴史の進行に、ある限られた範圍ではあるが、變化がおこりうる餘地を認めている。

「生産力の發展が、人類の歴史的運動の終局的で、もっとも一般的な原因であると考へなければならぬ。そして、人間の社會關係のあいつぐ變化を規定するもの

は、これらの生産力である。この一般的原因とならんで、特殊な原因がある。……特殊な原因の影響は、個々の原因、すなわち、社會活動家の個人的特質やその他の『偶然』の作用によっておぎなわれる。そのおかげで事件は、さいごには、個人的な様相を呈する。個々の原因は、一般的原因や特殊な原因の作用に根本的な變化をもたすことはできない。それだけでなく、これらの原因によって個々の原因の方向と限界がさだめられる。にもかかわらず、歴史に影響をあたえた個々の原因に、おなじ種類のべつの原因がとってかわっていたら、歴史はちがった様相を呈していただろうということは、うたがいない」（英譯五〇頁、邦譯八四頁）。

プレハーノフは、さらに歴史における偉人の役割を規定し、また世間の人々が歴史の動因としてのその力を過大視する事由について説明している、

「ナポレオンは、社會の秩序を救う『名刀』の役割となつてあらわれ、それによって彼以外のすべての將軍たちをこの役割からとおざけたが、その將軍たちのあるものは、ナポレオンとおなじか、あるいは、ほとんどおなじようにその役割を果たしていたかもしれないのである。

……ナポレオンの個人的な力は、きわめて大げさな力たちでわれわれのまえにあらわれる。というのは、彼の個人的な力をまえにおしだし、それを支えていたあらゆる社會勢力を、われわれは彼の個人的な力のせいにしてしまふからである。ナポレオンの個人的な力は、われわれには、なにか全く異常なもののようにおもわれる。というのは、それに似た他のさまざまな力は可能性から現實性に變らなかつたからである。そこで、もしもナポレオンがいなかつたらどうだっただろうか、ときかれると、われわれの想像は、こんがらがって、彼の力や影響のもととなつていた社會運動はすべて、彼がいなかつたら、まったくおこらなかつただろう、とおもわれるのである」（英譯四二頁、邦譯六九—七〇頁）。「偶然の現象や有名な人びとの個人的な特質は、深いところにひそんでいる一般的な原因よりも、はるかに目につきやすい」（英譯四七頁、邦譯八〇頁）からである。

「偉大な人間が偉大なのは、彼の個人的特質が偉大な歴史上の事件にたいして個性的な様相をあたえるからではなくて、彼がその時代の大きな社會的要求——一般的原因や特殊な原因の影響をうけておこつた要求——に、

彼をもっともよく役立たしめることができる特質をもっているからである。カーライルは、彼の有名な英雄についての書物のなかで、偉大な人間を創始者とよんでいる。これはじつに、うまいよび方である。偉大な人間が創始者であるのは、他の人びとよりも、より遠く先をみとおし、また他の人びとよりもより強くそれをのぞむからにはかならない。彼は社會の知的發展のそれ以前のあゆみがもちだした學問上の課題を解決する。彼は、社會關係のそれ以前の發展がつくりだした新しい社會的要求をさししめす。彼はこれらの要求をみたすために率先する。彼は英雄である。だが彼が物事の自然のあゆみを止めたり、變えたりできるという意味で英雄なのではなくて、彼の活動がこの必然的な無意識のなりゆきを自覺し、これを自由に表現するものだという意味で、彼は英雄なのである。この點に彼のあらゆる意義があり、この點に彼のすべての力がある。だがこの意義は巨大であり、その力はおそろべきものである」(英譯五一頁、邦譯八五頁)。

以上が歴史における個人の役割に關するマルクス主義の見解である。この問題も歸するところ、唯物論か觀念

論かという争に根ざしているものである。しかし、これを、すこし違った視角から検討してみよう。

七 潜在原因と機會原因

一般に、人間歴史の生成の原因には潜在原因と機會原因という二つのものがあり、この結合によって、個々の事件は現實化するものである。瓜の蔓には、茄子は實らない。人間の歴史、社會生活についても、また然りである。これは唯物史觀の支持者も反對論者も、みな認めざるを得ない自明の理である。

ブレハーフもいう、

「ある種の才能をもつ人間が、その才能によって事件のなりゆきに大きな影響をあたえるためには、二つの條件がまもらなければならない。第一に、かれの才能は、他のだれよりもかれをその時代の社會的必要に應じたものにしなければならない。もしナポレオンが、その軍事的天才のかわりにベートーヴェンの音樂的才能をもっていたとしたら、彼は、もちろん皇帝にはならなかっただろう。第二に、現存する社會制度は、ちょうどその時代に必要で、役に立つ一定の特質をもった個人にたい

して、みちをとぎしてはならない。舊體制がフランスで、その後さらに七十五年間も存続したとせば、このナポレオンその人も、あまり有名でないボナバルト將軍がボナバルト大佐となって死んでいただろう」(英譯四三頁、邦譯七〇—七二頁)。

社會的存在、環境を第一次的のものとする史的唯物論は、二原因のうち、明かに機會原因に重點をおくものである。しかし潜在原因——ものの本來の特質、個々人の生來の素質、才幹等——もまた輕視できない。史的唯物論では、潜在原因を決して無視するものでないこと、すでに再三述べた通りである。しかし、その重要性を與える程度に問題があるのである。

八 因果必然性と價值判斷

つぎに疑問として提出したいのは、因果必然性と價值、理想の問題である。史的唯物論では、社會發展の因果必然性を認識し、これに従う活動、政策に意義を認めるのである。そのいうところの自由は、たんに束縛の對立物としてのみ考えられるのではなく、必然の自覺である。「自由とは意識された必然である」と解されている。

既述のように、マルクスは一八七一年「國際労働者協會」の宣言のなかで主張する。「労働者階級は實現すべき何らの理想ももっていない。崩壊しつつある市民社會の胎内に、すでに發展してきた新社會の要素を解放するだけでよいのである」と。

はたして、そうなのであろうか。

これについての卑見はいままで拙著でくりかえし述べたように、社會現象の場合にかぎらず、一般にある狀態の發展が因果必然的のものである、という事實のみを證據として、この傾向にしたがう人間の意識的努力を是認すべしという結論は必ずしも派生しないのである。この發展過程が人間の生活の發展にとって望ましいものであるという價值判斷を加えて、はじめて、この必然的過程を意識的にすすめようとする努力に意義が發生するのでなかろうか。例えば、死亡ということは、すべての人間に必ずおこる現象であるが、死亡ということは、自殺者等の少數の例外を除いて、つねに望ましくないことと解されている。故に人々は最後の瞬間まで、この望ましくない狀態がおこらないように努力をする。歴史、社會生活の場合も同様である。史的唯物論者は、社會發展の法

則 Werden または Sein のうちに、生成または現實のうちに、Sollen 努力目標をもとめ、この方法によって現實と理想とを一元的に綜合すると主張するが、いかに綿密に、現實の認識分析をこころみ、また歴史的發展傾向を把握してみても、これのみにもついで、存在または發展傾向そのものが望ましいとか、望ましくないとか等の價值判斷は生れない。こういうことを主張するには、その議論の前提として「存在」または「生成」が、つねに「當爲」であるという論證を、まずあげなければならぬ。文明の發展を墮落の行程と解する主張すらあるのである。客觀的な現實世界をいかに綿密に分析しても、これだけでは、いかにすべきか、という努力、その理想はうまれ得ない。

實際生活上、場合によっては理想の設定が自明のように思われることもあるが、これを反省分析するとき明かとなるように、われわれは、この場合でも理想を設定し價值判斷を下しているのである。例えば失業によって生活に困っている人々が社會にあふれている場合に、失業者の困窮という現實を把握して、それから直ちに、その對策の必要が問題となり、一見、理想の設定が行われな

いで、現實の分析のみから直ちに理想ないし對策が生まれるように思われるが、事實はそうではない。「失業者の窮乏」という現實の把握のつぎに、「これは望ましい状態ではない」という價值判斷を下し、より望ましい状態を想定して、はじめて對策の攻究に問題はすすむ。しかし、この場合では、何かの對策が必要であるということとは、ほとんど異論の餘地のないことであるからして、理想の問題がつよく意識されないのに過ぎない。要するに、現實の研究のみからして、理想、従つて對策の構成は行われないのである。ムブランガーは、巧妙な比喻を用いて説明する。「三角形と圓形の觀察にもついで、圓形であるべきであり、三角形であつてはならない、と推論しえないように、事實上の經濟狀態自體にたいする洞察から、いま何がなさるべきであり、何が價值があり、また價值がないか、という規準は生まれなう」(E. Spranger, Die Stellung der Werturteile in der Nationalökonomie, Schmollers Jahrbuch, 1914, II, H., S. 84.)。社會主義における空想的社會主義と科學的社會主義の對立も、この點についていえば、程度の差である。空想的社會主義といつても、現實をまったく無視するもので

はない。科學的社會主義にくらべて現實の認識が不十分というに過ぎない。認識不足は認識無視とは異なる。また科學的社會主義の場合も、社會主義社會が、資本主義社會に比して、よりたかい價值を體現するという價值判斷を加えた結果、成立する主張である。この場合でも理想の要素は混在している。眞の意味における空想とは、現實と、目指してすすむ理想との間に、價值の等質連續關係を認めえない場合である。

九 宿命論と人間努力

この場合、一言つけ加えておきたいのは、史的唯物論と宿命論の關係である。史的唯物論では、社會發展の因果必然性を認める。——もちろん人間の意識的活動によって、その末梢的部分については方向をかえる餘地を認めるとしても、——とにかく、大局的にみれば、生産力の狀態によって、社會の内容、形態、發展は必然的に規定されると考えられている。この意味において、これに宿命論の要素があることは疑をいれ得ない。

そこでスタムラー等は、社會發展がすでに因果必然的に行われると豫定されているものと假定せば、社會運動

や政治活動によってその生成を助長しようとすることは、日の出や月蝕の生成を助長しようとする意欲活動と同じように、無意味であり、これについての情熱を減殺すると解している。

しかし、スタムラー等のように、宿命論が、つねに實踐活動において力ないし情熱を減殺するものと斷定する立場にも反省の餘地がある。プレハーノフも『歴史における個人の役割』のなかで主張しているように、「宿命論が精力的な實踐活動をかならずしもつねにさまたげなかつたばかりか、その反對に、ある時代には宿命論は、そうした活動の心理的に必要な土臺であつたことを歴史はしめしている。この證據に、清教徒……またマホメット教徒たち……をひきあいだしておこう。ある一連の事件がかならずおこると確信しさえすれば、それだけで、そのおこるのをたすけたり、あるいは、それに抵抗したりする心理的可能性がなくなる、と考える人びとは、ひじょうにまちがっている」(英譯七頁、邦譯一四—一五頁)。モーゼ、クロムウェル等も、自分の行動を神の意思に従うものと考え、これらの行動は、すべて、必然性にいろどられていたと信じていたのである。

このほかに、宿命論をとるとしても、人間活動には歴史の経過を、ある程度まで左右しうる力があるということは、史的唯物論を肯定するものも否定するものも、その程度においてこそ相違あれ、みな多かれ少かれ承認していること、既に述べた通りである。

一〇 結 語

要するに、史的唯物論も反對論とともに、ものの存在、歴史の動因について、經驗事實として、多くの要素があるのを認める點は同じである。兩者の對立は、そのうちのどれに重點を與えるか、どれに窮極的、第一次的意義を認めるかの相違にある。しかも兩者ともに、反對學說が主張する要素の價值は、たとえ限定された程度においてとはいえ、とにかく承認しているのである。哲學上の本體論の場合は別として、經驗的社會科學の問題としては、どうしても複數の要素があることを認めざるを得ないのである。學說の分歧は、それを認める程度の相違にあると思われる。これが素直な解釋であらう。二元論だとか、折衷論だとか、濟度すべからざるブルジョア的見解等といって、かるく一蹴し去らないで、いま一度、こ

れより出發して、この學說を反省してみる必要はないのであらうか。

最後に強調しておきたいのは、後世のマルクス主義者の間で、唯物史觀の方法を基礎とし、これに立脚して現實の歴史、社會生活を分析するとき、經濟的側面のみに過大の意義をあたえ、非經濟的要因を不當に輕視しようとするものがあり、またそれがマルクス、エンゲルスの教義に忠實であるかのように信ずる誤解が、しばしば行われていることである。エンゲルス自身も、既掲一八九四年のスタルケンブルグ宛の手紙のなかで、「觀察される期間が長いければ長いほど、また取扱われる領域が大きければ大きいほど、この軸線が經濟的發展の軸線により近似的に並行する」と述べているが、これを裏からいうと、觀察される期間と領域が短小であればあるほど、歴史社會の生成發展における非經濟的要因の作用の力が大であることがありうる事實を承認するものである。

さらに注目に値いするのは、一八九〇年のプロッホ宛の手紙のなかで、エンゲルスは、かかるゆき過ぎを、いましめて、つぎのように述べていることである。「往々

にして經濟的な面に、そのうけるべき以上の重點が後進者たちによって、おかれていることについては、マルクスも私も一部分は自ら責任を負わねばならない」(獨文三七六頁、邦譯二四七頁)。

「主要命題を覺えこむや否や、そして、それも正しくなされているとは限らないのに、新たな理論を完全に理解したと信じ、即座にこれを驅使しようと信ずるということは、遺憾ながら、あまりにも、しばしばあることである。そして、かような非難を私は近頃の『マルクス主義者』の少からざる人々に加えざるを得ない」(獨文三七

六頁、邦譯二四八頁)。

わが國でも「マルクス主義に立脚する」と稱する内外國の具體問題——政治、經濟、國家財政等々の個別問題——の研究書のなかに、かかる誤りをおかすものが多いのである。認識過多は認識不足と同じように、とかく性急なもののおちいりやすい陥穽である。戰術、戰略の場合ならばいざしらず、歴史社會を科學的に觀察しようとするものは、色盲ないし逆色盲であってはならないのである。

(一橋大學名譽教授)